様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６７８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ０２７９４

研究課題名（和文）全ての個の育ちを保障するための教師の遊び指導力向上プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a program to improve teachers' play leadership skills to ensure the development of all individuals

研究代表者
岩田　遵子（Iwata, Junko）

東京都市大学・人間科学部・教授

研究者番号：８０２６９５２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：教師（幼稚園教諭を含む。以下同じ）は保育実践において子ども一人ひとりを見取ることが必要だとされているが、それは容易ではない。なぜなら、教師は一人で30人の子どもたちに責任があり、子どもを見ることに専念することもできないからである。これまで、この困難を軽減する方法を唯一提案し得ているのが小川博久の「遊び保育論」であるが、それがどのように子ども一人ひとりを見取ることを可能にしているかという実態は明らかにされていない。本研究は、見取りの実際を遊び保育論を実践する教師がどのように子ども一人ひとりを見取り、援助を行っているかを明らかにし、実践過程において遭遇する困難とその克服の仕方を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
集団に対して責任を持つことを制度的に余儀なくされている教師にとって、子ども一人一ひとりを見取ることは容易なことではないにもかかわらず、そのための方略や実践知については明らかにされてこなかった。それに対して、この研究によってそのための方略と実践知を明らかにし、集団を相手にしながら、クラス全員の子ども一人ひとりを見取り、その際に遭遇する困難とその克服方法を明らかにすることによって、教師の遊び援助力を向上させるための課題を提示していること。

研究成果の概要（英文）：Although it is said that teachers need to observe each child as an individual in their early child education practice, it is not easy to do so. Because one caregiver is responsible for about 30 children and cannot devote themself to only watching their children. In this situation , Asobihoiku-ron (Theory of Play-centered Child Education and Care) by Hirohisa Ogawa , is the only theory that can proposes a way of decreasing those difficulties. But the actual figure of how this enables them to see each child as an individual has not been cleared. So this research clarifies it and the difficulties they encounter in the process and how they overcome them.

研究分野：保育学、子ども文化論、音楽教育学

キーワード：遊び保育論　集団　子ども一人ひとり　保育者の見取り

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

⑴　幼稚園教育要領にも記されているように、教師（幼稚園教諭を含む。以下同じ）には、幼児一人ひとりの活動の場面に応じた適切な援助を行うことが求められているが、それは幼児が主体的に遊びを展開する幼児教育実践において容易ではない。なぜなら、ｉ）施設では担任教師一人で見取らねばならない幼児が 30 人近くいる（対象の複数性）ことに加え、ⅱ）教師は見取ることに専念できず、常に何らかの援助行為をしながら行わねばならない（行為の同時並行性）からである。しかし従来、この２つの困難は、ほとんど問題にされてこなかった。

⑵　それに対して、２つの困難を軽減するための方略を提起しているのが小川博久（本研究協力者）の「遊び保育論」（『保育援助論』生活ジャーナル社、2000 他）である。それは、a）室内に図１のように遊びコーナーを設置し、b）教師（図の●）が図の位置に座り、「作る」パフォーマンスを行う。それがモデルとなって幼児の製作活動を誘発すると同時に、他のコーナーも幼児達（図１の◯）が群れて遊びが展開する。c）教師はモデルを演じつつ、各コーナーの遊び状況を見取り、ｅ）援助が必要と判断される場合は、遊びの援助に入る、というものである。この方法によって、クラスの全幼児が３～５つの遊びに群れ、図のような状態が持続すれば、２つの困難は軽減され、教師は全ての幼児の遊び状況を見取ることが可能になるはずである。この方略は、実践において一定の成果をあげてきたが、実証的には明らかにされていない。

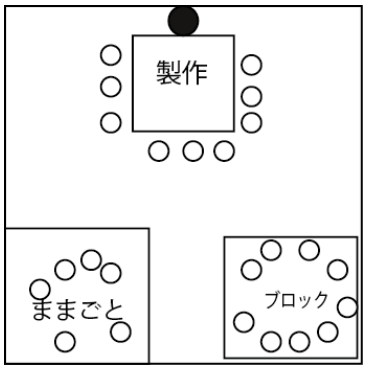

図１　遊び保育論の提案する子ども一人ひとりを見取れるための遊び状況

⑶　研究代表者は、「遊び保育論」を実践している複数の園でのアクションリサーチによって次のことを明らかにしつつあった。

①　教師の見取りは、幼児の遊び状況（群れが安定していること）に規定される。図のような遊び状況が維持される場合は、各遊びの見取りと一人ひとりに対する援助が適切に行われることが可能となるが、そうでない場合は見取りも援助も適切には行えない可能性がある。

②　そうだとすれば、遊び保育において教師がクラスの全幼児に適切な援助を行うには、図のような遊び状況が維持されるようにするために、幼児の遊び行動に対する間接的な指導力（以下「指導力」）が必要となるが、この「指導力」獲得には次のような困難が伴うと予測される。ア）子どもたちの仲間集団形成力が弱体化しており、群れを形成しにくい。イ）特に新人教師は、個別的関与の傾向が強く、幼児が群れることへの関心が低い、ウ）教師は遊びへの言語的関与の傾向が強く身体的関与（遊び行為のモデルを示す）への関心が低い。エ）　イ）とウ）の結果、幼児は教師に依存する傾向が強くなり、結果的に教師は遊びを見取る余裕がない。

２．研究の目的

⑴　遊びの「指導力」向上のためには困難をどのようにして克服できるかを構想することが必要となる。そのために、上記の「困難」についてのより具体的な実態を明らかにする。まず図１のような遊び状況を維持している教師（主に遊び保育論のベテラン教師）が、クラスの全員の子どもたちを見取れていることを明らかにする。それに対して、個別的関与傾向が強く、幼児が群れることへの関心が低い（主に新人教師）と、幼児の遊びの群れが安定せず、上図のような遊び状況が維持されない傾向が生じ、クラスの子どもたち全員を見取ることができないという実態を、実証的に明らかにする。

⑵　⑴が明らかにされる過程で新たな課題が生じた。教師の個別的関与傾向は、教師自身の関与傾向であるが、それはある特定の幼児への個別関与が新たな個別関与をせざるをえない状況を生み出すという、個別関与の連鎖となって現れるという実態であった。個別関与の連鎖は、上図の遊び状況の維持を困難にし、教師のクラス全員を見取る構えの維持も困難にすることが明らかとなった。この状況を克服するには、個別関与をせざるを得ない状況を生じさせないようにするための方略が必要と考えられる。それゆえ、個別関与をせざるを得ない状況において、ベテラン教師は、個別関与の連鎖の発生を防ぎつつ、個別関与が必要な幼児に対してどのように援助しているか、またクラスの子どもたちを見取る構えをどのようにして維持しているか、を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

⑴　「遊び保育論」を実践している施設において、図１の遊び状況を維持している遊び保育ベテラン教師と個別的、言語的関与を行う傾向が強い教師（新人教師）の実践におけるクラスの子どもたちの遊びにおける群れの実態（安定性等）を、俯瞰カメラの動画記録映像によって明らかにする。

⑵　教師のふるまい（言動、視線配布行動等）を、俯瞰カメラ映像、教師が装着したウェアラブルカメラによる記録映像、ワイヤレスマイクの音声記録の分析（dartfish pro を主に使用）から明らかにする。

⑶　教師が子どもの遊び状況をどのように見取っているかを、保育実践後のインタビューから明らかにする。

⑷　子どもたちの遊びにおける群れの安定性と教師のふるまい（視線配布等）、子ども一人ひとりの遊び状況読み取りの関係を分析する。

４．研究成果

⑴　上図の遊び状況を維持したクラスの教師（ベテラン教師）はクラスのほぼ全員について、どこでどのようにして遊んでいたかを読み取っていたが、個別的関与傾向が強く、幼児が群れることへの関心が低い教師（主に新人教師）はクラスの数人の子どもしか把握できていないことが明らかとなった。

⑵　⑴は、室内の各遊びを見る時間の長さによっていた。上図の遊び状況を維持したクラスの教師（ベテラン教師）は室内の各遊びに視線を向ける時間が長いのに対して、個別的関与傾向が強く、幼児が群れることへの関心が低い教師（新人教師）は、室内の各遊びに視線を向ける時間が僅かであった。

⑶　各遊びに視線を向ける時間の違いは、子どもたちを見る構え（視線配布のありよう）にあることが分析から明らかとなった。上図の遊び状況を維持した教師（ベテラン教師）は、製作コーナーで物を作るパフォーマンスをしながら、常に室内の遊び全体に視線を向け、俯瞰するまなざしを持っている。それに対して、個別的関与傾向が強い教師（新人教師）は、自分の側にいる子ども一人あるいは数人しか見ておらず、ほとんど部屋全体を見る俯瞰する視線を持っていない。

⑷　俯瞰するまなざしは、単に俯瞰しようという意識があることによって可能となるのではなく、教師の子どもへの関与のあり方が俯瞰するまなざしの成立に関わっていることが明らかとなった。個別関与を続けると、子どもたちに潜在している教師との個別関与への要求が顕在化し、教師の周囲に集まってしまう。その結果教師はその対応に追われて、順番に個別関与を続けざるを得なくなる。つまり、個別関与はさらなる個別関与の連鎖を生み出すことになり、俯瞰するまなざしの確立を妨げる。

⑸　ベテラン教師の場合、個別関与が連鎖することはほとんどない、それを可能にしている要因として考えられるのは、第一に子どもたちが教師に依存的でないこと（子どもたち自身で遊びを進めることができる）であり、第二に、個別関与を求めてくる子どもに対する教師が、そのマルチモーダルな身振りによって、子どもが教師と個別的に関わることに拘泥せず、自ら遊びに向かうように促していることである。

　教師に個別に関わる子どもに対して教師が視線を交差させながら言語的に関わってしまうと、その子どもは教師との個別関与に没入し、他の子どもたちの教師と関わりたいという潜在的な欲求も顕在化することになり、結果的に個別関与の連鎖を生み出す危険性が高くなってしまう。それに対して、ベテラン教師は、関与を求めてくる子どもに発話行為としては応じながらも、その子どもと視線は交差させずに作るパフォーマンス（製作コーナーにいる場合）を維持しながら、作っている手元に視線を向け続ける（つまり教師の主要な関心は作ることにあるという身振りをする）ことによって、その子どもは教師の作る行為に関心を持ち、自らも作る遊びに向かうという場面がいくつか観察された。そして、この身振りによって、教師は室内全体の遊びを俯瞰するまなざしを確立していると考えられる。

⑹　以上のように考えるなら、クラス全員の子どもを見取れるようになり、遊びの「指導力」を向上するためには、第一に上図のような遊び状況を維持すること、第二に、そのためには、教師が、作るパフォーマンスを主要関与とし、個別関与を副次的関与であるかのようにふるまうというマルチモーダルなふるまいによって個別関与が連鎖しないようにすることが必要となること、が明らかとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 岩田遵子	４．巻 13
２．論文標題 「遊び保育」実践において子どもの個の理解はどの様に行われるか(3)―遊びの見取りを可能にする条件	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京都市大学人間科学部紀要	６．最初と最後の頁 33ー54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩田遵子	４．巻 第12号
２．論文標題 「『遊び保育』実践において子どもの個の理解はどの様に行われるか―群れとして展開される遊びの読み取りによる媒介	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東京都市大学人間科学部紀要	６．最初と最後の頁 25~41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岩田遵子	４．巻 11
２．論文標題 一斉活動における「子ども文化」生成における困難とその克服― わらべうた遊びの輪の形はどのようにすれば維持されるか ―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京都市大学人間科学部紀要	６．最初と最後の頁 9-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 吉田龍宏
２．発表標題 私立保育施設の経営論―園長の専門性に関する先行研究の検討①
３．学会等名 日本保育学会第75回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 吉田龍宏
２．発表標題 保育者はどのような幼児理解が求められるのか―「幼児理解の理論と方法」のテキストと保育実践で必要となる幼児理解の相違―
３．学会等名 日本保育者養成教育学会大会第6回
４．発表年 2022年

１．発表者名 岩田遵子・吉田龍宏・山田祥子・鈴木まり
２．発表標題 集団保育において全ての個の理解を可能にする条件は何か（３）―「遊び保育論」における「見る」構えを維持するための「方略」
３．学会等名 日本保育者養成教育学会大会第6回
４．発表年 2022年

１．発表者名 岩田遵子
２．発表標題 保育者の専門性とは何か――一斉的活動と自由遊びの連続性の視点から
３．学会等名 日本保育学会第74回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉田龍宏・山田祥子・鈴木まり・岩田遵子
２．発表標題 クラス活動における子どもの主体性はいかに確立されるか⑥
３．学会等名 日本保育学会第74回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉田龍宏・岩田遵子・山田祥子・鈴木まり
２．発表標題 集団保育において全ての個の理解を可能にする条件は何か（１）―「遊び保育論」（小川博久）の重要性―
３．学会等名 日本保育者養成教育学会第5回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 岩田遵子・吉田龍宏・・山田祥子・鈴木まり
２．発表標題 集団保育において全ての個の理解を可能にする条件は何か（２）―保育者の俯瞰する眼差しの意義
３．学会等名 日本保育者養成教育学会第5回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉田龍宏・岩田遵子・山田祥子・倉知早穂
２．発表標題 クラス活動における子どもの主体性はいかに確立されるか⑤
３．学会等名 日本保育学会第73回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 吉田龍宏・岩田遵子・山田祥子・鈴木まり・倉知早穂
２．発表標題 全ての子ども一人一人の理解はいかにして保障されるか（１）―保育者が幼児たちと関わる集団実践理論としての「遊び保育論」（小川）の意義―
３．学会等名 日本保育者養成教育学会大４回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 岩田遵子・吉田龍宏・山田祥子・鈴木まり・倉知早穂
２．発表標題 全ての子ども一人一人の理解はいかにして保障されるか（２）―保育実践例の比較分析を通して―
３．学会等名 日本保育者養成教育学会大４回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 岩田遵子
２．発表標題 一斉活動における「子ども文化」の創成(２）―子どもたちによるルールの生成―
３．学会等名 日本保育学会第72回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田龍宏・岩田遵子・小川博久・伊藤早穂・山田祥子
２．発表標題 クラス活動における子どもの主体性はいかに確立されるか（４）―２歳後半～３歳にみる同型的同調から応答的同調への変化―
３．学会等名 日本保育学会第72回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

小川博久・岩田遵子　共同企画編集　DVD 『遊び保育の実際　第１巻　０、１、２歳児』2020年　新宿スタジオ 同　『遊び保育の実際　第２巻　３歳』2022年　新宿スタジオ

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉田　龍宏 (Yoshida Tatsuhiro) (70369578)	名古屋学院大学・スポーツ健康学部・准教授 (33912)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関